

ホクギンレポート

変わりゆく日本の貿易・港湾と新潟県の貿易動向 ～県内港湾の日本海側拠点港化への期待と課題～

要 旨

1. 日本貿易の長期的トレンドをみると、貿易額は1960～80年の20年間で20倍に急増したあと、80～90年代はやや停滞をみせた。2000年代に入ると、新興国経済の勃興や円安などを背景に、輸出を中心に再上昇し、貿易額は08年にピークをつけた。しかし、08年9月のリーマン・ショックの影響を受け、09年には大きく落ち込み、立ち直りをみせた2010年も05年の水準にとどまった。
2. 日本の貿易構造をみると、輸出品目では、鉄鋼、造船という重化学工業製品から、自動車、半導体、プラスチックや有機化合物など輸送機械や電子部品、化学製品へ比重が移行している。一方、輸入品目では、燃料、原材料、食料から製品や部品の輸入へと次第にシフトしている。貿易相手国では中国を中心としたアジア諸国のウェートが高まっている。また、世界の港湾情勢では、アジア各国が主要港湾の整備・拡大を推進しており、日本国内の主要港湾の相対的地位の低下がみられた。
3. 県内企業の貿易動向をみると、2000年代に入り貿易取引が活発化し、08年には輸出入総額が8,841億円と過去最高となった。輸出品目では、「機械機器」、「化学品」、「金属品」が全体の90%以上を占めている。また、輸出相手先では中国や韓国などアジア向けの伸びが高い。一方、輸入品目では、LNGなど「鉱物性燃料」の割合が一貫して高い。輸入相手先では、アジアに加え中東・アフリカも伸びている。県内の港湾別貿易状況をみると、輸出入とも新潟港が圧倒的に高く、直江津港と合わせると、輸出入総額の99%を超え、新潟港と直江津港の両港が県内の主要港となっている。
4. 県内の貿易関係企業に対してアンケート調査をしたところ、県内企業の貿易取引は輸入を中心に拡大していた。また、輸出面では、まだリーマン・ショックの影響がみられたほか、先行きについても強弱見方が分かれた。今後は東南アジア諸国の重要度が増すとの見方が増えていたが、輸出面では円高や景気、輸入面では品質や決済に不安ありとする回答が多かった。地元の港湾や空港を利用したいとの意向は高かったが、定期航路数や定期便数がネックとなっていた。
5. 県内貿易の振興のためには、東アジアにとどまらず、多方面貿易への対応が必要となっている。また、貿易構造における輸入偏重の是正、重要度が増す東南アジア航路の拡大なども課題となっている。県内港湾に対しては、真の日本海側拠点港としての整備・拡充を強く望む。

構 成

- 第1章 我が国の貿易構造および港湾機能の変遷
- 第2章 新潟県の貿易取引と主要港湾の現状と課題
- 第3章 「輸出入取引アンケート調査」の結果より
- 第4章 新潟県の貿易振興と港湾利用促進のためには